

〔出席委員〕 小谷次雄、西坂千代子、吉田知子、福田美紀、荒瀧美由紀、
永田彰寿、名越和範、笠見猛、山下千之、笠田直樹、藤原彰二（敬称略）

1 開会	
司会	（開会の宣言）
① 開会挨拶	
会長	27年度内最後の会となる。教育振興基本計画について今まで審議していただいたものが、パブリックコメントとして公になっている。今日はそれに対して意見をいただき、学校教育審議会として一応の了承をする形に持っていきたいと思う。よろしくお願ひしたい。
司会	資料確認
2 協議	
教育長	倉吉市教育振興基本計画第二期（案）についての説明
会長	教育振興基本計画については、今まで会を重ね討議をしてきた意見を踏まえて、教育委員会としての新しい考え方を入れているということで話を聞いた。学校教育に関する項目についてだけを、この会では話し合いたい。最初に、倉吉教育の現状と課題について、10ページまでで気づいた点を出してほしい。
教育長	歳出合計と教育費を比べて構成比の割合が出ているが、何とか10%は確保したい。施設設備費があるときは高いが、それが無い時は厳しい。28年度は、当初予算だけ見ると8%程だが、成徳小学校の建て替えは補正予算で対応する。これを含めると約6億円となり、10%を超えることになる。もう少しソフト事業に力を入れていかなければと思っている。
会長	ソフト事業になると予算が付きにくい。
教育長	目に見えないと付きにくい。しかし、本当はもっとソフト事業を充実しなければならない。
委員	P3幼児教育の充実の成果指標で、教員同士の交流が43%と例年と比べて大きく落ちているのが心配である。時間が取れないのか。
教育長	やはりその通り。交流しなくてはいけないことは分かっているが、他に急がれることがあってできていないというのが現状。保育園は広域になっているので、調整だけでも大変であったと聞いている。小中連携・保幼小連携・中高連携と学校は大変である。
委員	今年は小中連携に関して、各中学校区に15万円の予算をつけていただいた。研修会・授業参観・先進地視察などを通して、確実に各校区で深まった。来年もお願ひしたい。
委員	保育士は今、臨時の方が非常に多い。また、1小学校に多くの園から子どもが行っており、園によって取組み方もいろいろであり、調整が難しいのではないかと。中学校の不登校が多くなっているのも気になる。学力も8割方の子がいいとしても、あとの2割近い子の家庭の状況を含めて、学習環境がどう確保されているのか、食の問題や親子の関係がどうなっているのか。そのあたりを解決していかないと、ついていけない状況の子どもたちを救い上げるのがなかなかできない。学校の中だけでは解決が難しい。コミュニティースクール（CS）を進めて、学校と地域との相互の支援のし合い、補完・連動をしていかないと本当に難しい。子どもたちの社会性が低いことをどう解決するかと考えれば、やはり地域の人の力が必要になってくる。
委員	それは学校の方だけで解決する問題ではない。不登校や問題行動を起こす子の多くは、家庭的に恵まれていなかったり、親の養育が十分でなかったり、地域から孤立している家庭であったりする。連携がないために、親も孤立している。周りから協力が得られない結果が、子どもにしわ寄せとしてきているのではないかと。

	<p>と思う。パーセンテージだけでは語れない一人ひとりの子どもの保障をどうするのか。いかに地域が関わっていくのか、家庭をいかに育てていくのかが大事なポイントだと思う。</p>
委員	<p>もう一つ進めなければと感じたのは、学校・地域・保護者が1つの事業に取り組んで動く状況をつくるということ。そうすれば次のステップが踏めるのではないか。事業連携をしていくことが大事。また、赤ちゃんふれあい会を、中学校では必ずやるということにはならないのかと思う。赤ちゃんの確保が難しい状況にあり、小学校が実施すると赤ちゃんが足りなくなって、9月は毎週2～3回あって赤ちゃんの奪い合いみたいになってしまった。ふれあいの様子を見てみると、中学生が一番効果が高い。1回と言わず2回でも出会わせる方がいいかと思う。赤ちゃんの保護者も、自分の子が中学校になった姿をイメージでき、「来て良かった」という感想も中学校の方が大きい。全中学校で実施するのがいいと思う。</p>
事務局	<p>赤ちゃんふれあい会は、今年度中学校4校で実施している。</p>
委員	<p>子どもの貧困が年々進行している状況にある。先進国では日本は最低クラスだと言われている。自分が高校に勤務していた頃、授業料免除を受けている生徒の率が年々上がってきていた。県の進学校には免除を受けている生徒は少ないが、公立校の中には、56%の生徒が受けているという高校もあった。親の経済状況が、子どもの学力に影響しているということである。これを教育委員会の施策でどうにかするのは難しいが、この状況を何とかできないかという視点をもって、今後方向性を打ち出していただければと思う。大学に進学するには奨学金制度がある。しかし、利子をとっている場合が多い。子どもの名前でローンを組んでいる訳である。中には、卒業してみたら500万円の借金を背負って社会に出る例もある。就職がうまくいかなかったら、それだけで生活に困ってしまう。これは本当に先進国なのかという状況がある。「どうやって子どもの貧困を止めていくのか」を考えていくことが、必要になってきた時代かなと思う。</p>
教育長	<p>日本が高度経済成長で伸びていた時期には、世の中の仕組みを変えていくエネルギーの塊があった。今のような格差社会では難しい。逆に、国家の貧困にもつながっている。大きな話にはなるが、課題としては持っておかなければならない。</p>
委員	<p>去年の冬になるが、高校生の年齢の子で、家庭の事情で家を出てしまって、その日その日の泊まる場所がない子がいた。仕方がないので、公共トイレで寝泊まりして過ごしていたようだ。年を越すのもトイレで過ごしたらしい。うちに来るように誘ってもみたが、遠いのでと断られた。「今日もトイレ。寒くてたまらない。」という話をずっと聞いていた。この場で話すことではないかもしれないが、倉吉の中にそういう子がいるということがつらい。知っておいてもらえたらと思って話した。</p>
事務局	<p>この情報は掴んでいない。生徒指導上の別の観点（深夜徘徊等）では、関係機関と連携しているが。</p>
委員	<p>市役所の関係課の方は知っていた。因伯子供学園にも1泊したが、うまくいかなくてもとに戻ってしまった。真冬の寒い時期を、トイレで過ごしている子がこの倉吉にいるのに、何ともできないのかと思って無力さを感じながら去年の冬を過ごした。</p>
委員	<p>親子関係が崩れたら子どもは出てしまう。親の方も手に負えない状態になっているので、子どもが飛び出ても動かない。その子が、児童相談所等に飛び込んだら助けてくれることを知っていれば対応もできるが、知らないとな今の状態になる。また、例えば一人親ではないが、経済的に苦しいとか親子関係が崩れているなどの制度の狭間にある家庭には、よほどの大きなことが表に出ない限り支援はできない。父子家庭で、生活保護を拒否されれば、その子は何の支援も受けられない。この制度の狭間をどう埋めていくのかが大きな問題である。CSを積</p>

	<p>極的に進めて、学校と地域をかみ合わせていくことが必要である。中学校段階になると、親だけで社会的なことを教えるのは限界がある。第三者に語ってもらい寄り添ってもらえると子供が成長していける。貧困対策も地域をあげてやらなければならない。</p>
事務局	<p>就学援助を受けている家庭は、全市で10～12%で大きく増えている状況ではない。入学説明会等で広く広報しながら声かけさせていただいている。今回、重点施策⑦家庭教育の充実の主要施策「子育て支援体制づくりの充実」の中に、「生活困窮者家庭への支援について福祉部局との連携」をあげている。子ども家庭課の方が、一人親家庭に対して土曜日の公民館を使って、送り迎えも含めた学習支援に2年ほど前から取り組んでいる。教育委員会も連携しながら各校に周知していく。また、県の事業で、スクールソーシャルワーカーを現在2人配置しているが、県が拡充の方向性を打ち出したので、来年度は3人体制で望みたいと思っている。最終的には、国も各中学校区に1名ずつ打ち出している。教育現場からの家庭支援を、倉吉市でも模索しながら進めている状況である。</p>
委員	<p>友人の子どもが不登校になったのだが、一番救われたのは学校外の病院の先生とか専門の先生に話を聞いてもらったことだと聞いた。全く真っ白な状態でアドバイスしてもらったので、母にとっても子どもにとっても救いになったと。学校とは違う立場の人に、気軽に訪問できたらいいと思う。やはり、学校の敷地内には人目もあるし行きにくいということだ。</p>
会長	<p>重度の不登校の子どもの中を考えると、学校という言葉さえ使ったらダメだと思う。学校に近づくだけでも、足が動かないようになる。</p>
委員	<p>学校に行く・行かないということ以前の意識の子も増えている。学校に行く意味が感じられないという子がいる。そういう子には、解決の糸口さえ見い出せない。いい方法があればとは思いますが、粘り強く関わっていくしかない。</p>
委員	<p>中学校区毎に、育成・支援の方法が考えていける仕組みがないといけないと思出し始めた。小学校のうちは問題は大きくならないが、それを持ち越して思春期になるので、その時には問題が何倍にも大きく膨れあがってのしかかってくる。しかし、ここで解決していかないと、将来、虐待や殺人などの犯罪に手を染め、最終的には高齢者虐待ということになってしまう。教育でも福祉でも、この10代のライフステージをどうするのかを真剣に考えねばと思う。</p>
教育長	<p>地域学校委員会の在り方として、中学校は小学校とは次元の違う独自のものを立ち上げねばという思いは持っている。</p>
委員	<p>現在、地域学校委員会は年2回開催している。行事等にも案内は出しているが、忙しくてなかなか見ていただけていないのが現状である。子どもに関わる課題に直面したときに、地域ぐるみで子どもを育てる組織が、学校と連携しなければならないと思う。地域の民生委員・主任児童委員等と学校が、意味あるつながりがあるかといえば、顔合わせはするが困っている家庭に入っただけのような状況にはない。地域の中で孤立している家庭が救われれば、子どもに元気が出てくるのではないかと。先程の貧困も含んでいると思う。そういう形の地域学校委員をつくっていくことは、有意義なことではないかと思う。</p>
会長	<p>具体的な話をさせていただいた。それぞれの対応を、28年度以降取り組んでいただければ。次に、重点施策について、P21～37まではどうか。</p>
委員	<p>先程教育長から、高校を卒業して県外に出て帰ってこなかった生徒が、鳥取県がダントツでワースト1という話があった。卒業した高校生達は、地元で仕事したい・帰りたいと相当数が思っている。しかし、大学に進学した生徒が帰ってくる時に、自分達が学んだことを活かして勤める場所が県内だとかなり限定されてしまう。「あんまり勉強させるから出てしまう。実業科高校の方が県に貢献している。」と言われた県会議委員もいた。帰ってくる場所まで教育委員会や学校関係者で考えなければならないのか。それはちょっと違うと思う。あまり問題視しないほうがいいのではないかと。</p>

会長	東京の鳥取県学生寮でインタビューをしていた番組があったが、帰りたい人は3人だった。「帰っても勤め先がない。なるとしても公務員か教師くらいだ。」という先入観が親も子もある。鳥取県でも、企業誘致されていることをもっと理解しないとイケない。学んだことを活かしたいので帰らないという子もいるが、帰りたいけど帰れない子もいる。学力をつけたら帰ってこないということは、以前から言われていた。県から「中部の学力が低いので学力を向上してくれ。」という話があったとき、「そんなことを言われたら困る。学力をつけたら地元に戻ってこないようになる。」と言われる教育委員は結構多かった。
委員	中学生が進路を決めるときに、自分の点数で進学先を決めている。「自分はダメだからここかな。」という言い方をよくする。「どこの高校に行っても、自分がやりたいことを一生懸命頑張れば道は開ける。」と言うが、子どもは先生や親から言われ続けて、点数重視の価値観を植えつけられている。自信を無くして自分はダメだと思っている。大人が言い方を考えねばと思う。「こっちに帰って来てこんな役割果たしてよ。」「この高校で資格取って地元貢献してよ。」という話し方をもっとしていかねばと思う。
会長	その他にはないか。学校教育に関しては了解でよろしいか。では、協議（2）重点施策の実績及び評価に移る。「倉吉市教育の創造」についてご意見を。
教育長	ここは教育総務課の部分が多いが、学校の適正配置については学校教育課の管轄なので記載した。
会長	なければ、「学力向上の推進」についてはいかがか。
教育長	英語を一番心配している。英語はちょっと自信がない。ずいぶん力をつけていると思うが、英語の教育環境について他県の様子を見たときに、鳥取は苦戦するという気持ちがある。それも含めてALTを増やしたいと思っている。
委員	文科省の方も、これまでの英語教育にさらにスピーキングという項目を増やして、全国学力テストの中でそれだけを別に行う方向でいる。全国的に、英語で自分の思いや考えを伝え合う授業という方向で進めている。高校ではすでに100%英語だけの授業を進めており、いずれは中学校でも100%英語の授業が導入される。どうしても都会より田舎の方が、英語に接する機会は少ないのではないか。中学校では、ALTが唯一の身近な外国の方ということになるので、充実を図っていただくのはありがたい。しかし、それだけでは対応しきれない部分がありはしないか。これまでのように、文法を覚えて、穴埋めをして、英作文をするだけでは不十分で、英語の授業そのものの形を変えていかねばならない。
委員	秋田・福井県はどう変化するのだろうか。相変わらず私立は全国学力テストに参加しないだろうが、今でも私立を含めたら東京が一番。結果的には今は東京は低い、私立が参加すれば高くなる。
委員	英語教育のもう一つ先の話になるが、英語で外国の人とコミュニケーションをとり、自分の考えを伝えるために英語教育をしている訳だが、海外の人は自分の国を語ることができる。私たち日本人は、母国のことを語れるのだろうかということを、英語教育が始まったときからすごく感じていた。自分の国のことを意外と語れないのが日本人。日本について学ぶ教育にも、重点をおいてやってもらえればと思う。
委員	私は若い頃陸上競技をしていたのだが、指導者の先生方がアメリカに行った時に、一番コミュニケーションをとれた人は、英語に堪能な人ではなく陸上競技に熱心な人だったと聞いた。つまり、自分の陸上のことについて語る内容をもっている、知りたい・伝えたいという気持ちのある人が、一番コミュニケーションができたということだ。高校でも、スーパーイングリッシュに取り組んだが、外部評価委員の方が「英語を聞く・話すことが目標というが、話したい内容がないと結局コミュニケーションはとれません。」と言っていた。そういう面で言うと、英語教育の本当の目標をどこに置くべきかというのは難しい問題である。

会長	英語に楽しく親しんで嫌いにならないようにしても、テストになると難しい。灘高を受けた子がいて、成績が返ってきたのだが、英語が断トツに低かった。「あとの教科は何とかついていけたが、英語だけはお手上げだった。」と言っていた。あれは受験用の英語だとは思いますが。
委員	大学入試もだいぶ変えつつある。
委員	平成31年に入る予定の英語のテストは、4技能(話す・聞く・読む・書く)全部の領域を行うテストになる。県の事業であるイングリッシュシャワー ROOMを、来年度は小学校に配置しようかという案がある。小学校5、6年生は教科化、3、4年生は外国語活動という形で英語が入ってくるので、小学校から徐々に意欲を高めてコミュニケーション能力を育成していくことになる。
委員	少々間違ってもいいという勇気のある子は吸収していける。
会長	それでは、「豊かな心とたくましい体の育成」はどうか。
委員	全体的には、自己肯定感をどうつけさせていくかだと思う。「ダメ、ダメ」では意欲がなくなってしまう。全てのことにつながるのかと思う
委員	全体を見て思うが、評価が全部Bというのはどうか。全庁的に基準が決まっているのは分かるが、非の打ちどころない場合でなければAがつかないというのはあり得ない世界だ。
教育長	当初の目標の110%以上がAということなので、Aはつけにくい。
委員	これだと全庁的に97%くらいがBではないか。もう少し評価が分かるような見直しをしたらどうか。
会長	よく頑張ったものにはAをつければと思う。Bばかりではどうかと思う。施策の中身が分からない面があるので、こちらから「ここにAをつけたら」とは言えない。
委員	Bに○や△がつくと分かりやすい。気持ちがよく分かる。
会長	では、「倉吉に誇りと愛着をもつ子どもの育成」についてはどうか。
教育長	「地域の人・もの・ことがらに触れる教育活動の推進」については、Bの○くらいと思っている。
委員	Aで出したらどうか。
会長	次に、「家庭・地域と連携した開かれた学校づくり」についてはどうか。
委員	教育を考える会で、地域の中で子どもをどう育てたいという共通認識はできているか。
教育長	できつつある感じはする。しかし、講演会で終わっているところもある。
委員	地域の方の参加は多いが、保護者は本当に少ない。今回は講師の先生の都合で平日の昼に開催したが、保護者はぐんと少ない。保護者も聞きたいだろうにこの時間では無理がある。しかし、土日開催したとしても、子どものことで何かと忙しいので、そこに行くという優先順位が落ちてしまう。会を魅力的なものにしていく必要がある。
委員	同じである。全体の人数はとても多いが、保護者の層は少ない。一番考えねばならない人達が参加できていなくて、最終的には会に参加している保護者が地域の人に責められてしまって元氣なく帰っていく。どうやってPTAを巻き込むのか。PTAでどうにかしないといけないとは思いますが、なぜ出席できないかというところになると、「小さい子を置いて家を出れない。」「子どもの送迎をしなければならない。」となる。どうにかしないといけないと思っている人もいるが、なかなかうまくかみ合っていない。
会長	成徳地区では、最初は地域全体に呼びかけていたが、焦点が分散してしまうしそれぞれの問題意識が違うので、3年前からテーマも参加者も焦点化した。今年度は、家庭・地域におけるしつけに絞って、PTAと地域学校委員会・民生委員を対象に開催した。問題提起は地域学校委員会が行ったが、保護者から結構意見が出た。あるときは自治公民館の館長さんだけ、青少協のメンバーだけとかいう

	ように焦点化している。割と中身が濃いものが出てくる。毎回同じような話になるのではだめだと思う。
委員	家庭のしつけについて、どういう意見が出たのかを知りたい。
会長	保護者が悪いとかではない。地域の大人の姿や家庭の環境を見て子どもは育つとか、子ども時代の話とか、あいさつ運動から分かる子どもの様子とか、昔の子育て・しつけの話などをした。その後は、4人くらいの小さなグループで話し合った。地域・PTAとしてどうしようかという結論は出ないが、それはそれでいいと思う。ここでの話を、学級懇談や青少協で提案してみたらどうかと言っている。
委員	小学校の保護者の時に、子どもが教育を考える会のちらしをもらって帰ってきたが、そのタイトルに恐れ多い感じがした。保護者が発言できるような会ではないと勝手に思い、タイトルが重すぎて行けなかった。もう少し身近なものにしてはどうか。
委員	対象となる人の幅が広すぎて、出てみたら先生と地域の方が8～9割で、保護者は1割くらい。保護者にも会の優先順位がある。自分が関わっている学校の委員会やクラスの行事には必ず出席しないといけない。ひと月に会がいくつも重なると、大きなくりのものは後回しになってしまう。
委員	公民館の会が出やすかった。身近な話ができる雰囲気だと出やすい。
会長	タイトルを「教育を語る会」にしてもらったかどうか。次に「よりよい倉吉教育を目指して」についてはいかがか。
教育長	特別支援教育で、今年は低学年のMIMというひらがな調査を実施したが、非常に効果があった。文科省の方でも発表させていただいた。Bの〇かと思っている。
委員	他県では、いくつかの協力校にお願いする形が多いが、倉吉市は全14小学校で取り組んだということで、文科省の方も非常に高く評価していると聞いている。非常に成果が出ている取組である。学校の先生からも具体的な取組を発表していただき、成果が出ている様子がよく分かった。
会長	「給食の充実、食育の推進」はいかがか。
教育長	異物混入はしょっちゅうある。しかし、対応はきちんとしている。事例の半分以上は、子どもに提供する前に発見して未然に防いでいる。
会長	給食センターは民間委託か。
教育長	調理業務だけが民間委託。食材の購入や献立作成、会計等は市で行っている。
委員	子どもが考えた献立はどこに書いてあるのか。
教育長	給食週間行事の実施のところになる。
委員	つい先日小学校に行ったときに気づいたのだが、1種類をすべて食べてしまう子が何人もいてビックリした。ある子は、御飯だけをまるまる残して、最後に塩をかけて食べていた。
会長	高齢者との交流で小学生と食べるときには、真っ先にそれを言われる。今の子はこんな食べ方をするのかと。
委員	給食の味付け自体はおいしかった。
委員	家ではワンプレートが多くなっている。
委員	共働きだとそれも分かる気がする。洗い物もたくさんあると大変だから。
会長	では(3)倉吉市立小・中学校の適正配置について
教育長	倉吉市立小・中学校の適正配置についての説明。
会長	質問・意見はないか。
教育長	議員の中にも、判断をしなければならぬ時期に来ていると言われる方もある。また、反対の地域に事務局はもっと出かけなさいと言われる方、分校案も考えねばと言われる方もある。ただ、全体としては進めていかねばと言われる議員がほとんどかと思う。

会長	この前の新聞に署名運動の記事が載っていた。
教育長	高城地区から単独存続という要望が出た。しかし、地区振興協議会で協議をしてまとめたわけではない。メンバーの中の何人かの自治公民館長等が署名をしたということ。自治公民館長会の中で議論したわけでもないと聞いている。あとは議会がどう判断するか。誤解もあるので、自治公民館長会で資料を持って今までの経過も話してこようかと思っている。
会長	その他なければこれで協議は終わりとする。
教育長	言い足りない部分があれば、また後日でも意見をいただければと思う。
4 閉会	